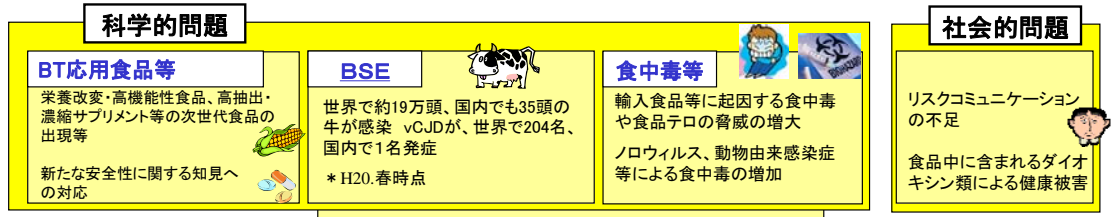
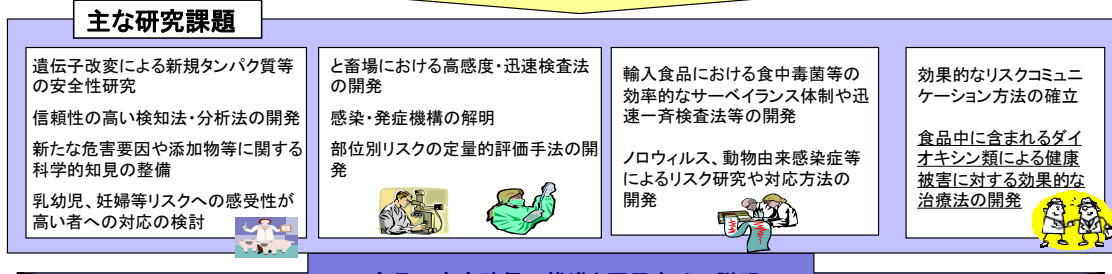


# 食品の安全に資する研究の推進



## 食品の安全に対する不安の増大



## 食品の安全確保の推進と国民向けの説明

### 健康安全・安心の実現(2015年頃までに食品による健康被害事例を低減させる。)

成果目標

2010年までに、次世代の食品の安全性を確保するため、意図せざる新規代謝物質の発現等の影響を検証する手法を開発  
 2010年までに、輸入食品における食中毒菌等の体系的サーベイランス体制を構築  
 2010年までに、と畜場におけるBSE検査用高感度・迅速検査法、食品中に存在する食中毒菌等の迅速一斉検査法を実用化  
 2010年までに、添加物450品目について安全性に関する科学的知見を整備  
 2010年までに、食品の安全に関するリスクコミュニケーション手法を体系化

## 牛海綿状脳症(BSE)対策

BSE発生 **国内29頭** 世界約19万頭

変異型CJD発生 **国内1名** 世界195名

BSEに対する国民の不安は、BSEのヒトへの感染・発症機構が解明されていないことが最大の要因

⇒食品を介するBSEリスクを解明することは、安全・安心で質の高い食生活が可能な国への発展に貢献

<課題>

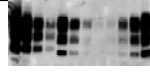
1) プリオンの高感度・迅速検査法の開発

2) 牛海綿状脳症の感染・発症機構の解明

3) 食肉汚染防止のためのと畜解体処理方法の開発

<研究成果>

- 病理・免疫組織化学検査  
迅速包埋法の開発(7時間)と確認新規検出法の開発
- 新規抗プリオン抗体の開発と応用  
ニワトリ、マウス抗体の作成
- 蛍光相関測定法のシステム化完了



- 国内BSE例の Maus 馴化株の作出とパイオアッセイによる種間バリアーの解析
- 羊、山羊、牛さらにシカのプリオン遺伝子解析(国内ではCWDはみつからなかった)
- 疑似患者の観察とウシ脳内接種
- BSE接種カニクイサルの病態解析



- ◆ 牛枝肉とブロック肉の脳・脊髄組織(GFAPを指標)残留調査
- ◆ 脳・脊髄組織の添加回収実験



【今後の課題】

と畜場におけるBSE検査用高感度・迅速検査法の開発

最小発症プリオン量及びプリオンの体内分布データなどを活用した部位別リスクの定量的評価手法の開発

中枢神経組織による食肉汚染の評価手法の実用化

CWD : Chronic Wasting Disease 慢性消耗病

GFAP : Glial Fibrillary Acidic Protein グリア細胞繊維性酸性タンパク